

歴史学習における地域調査と博物館の利用

市原市立国分寺台西中学校 木下和巳

1 歴史学習における地域調査

① 本校の立地条件から

現在使われている教科書では、地理も歴史も「身近な地域の調査」を盛り込んでいる。しかし実際は学校の規模や職員体制、確保できる時数など制約が多く、十分に時間をかけて行うのは難しいのが現状である。しかしながら、身近にある遺跡や歴史的建造物をうまく活用すれば生徒の学習に対する興味関心を高める効果があることは間違いない。

本校の周辺には上総国分尼寺遺跡が隣接し、歴史的遺産が多い地域である。上総国分尼寺の寺域は国内最大級に属し、発掘調査によって古代寺院の全貌が明らかになるなど史跡としての価値は高く、評価されている。とくに本校は、上総国分尼寺の北門の遺跡があった部分にグラウンドの一部がかかる状態で建設されており、校章も上総国分尼寺跡から出土した瓦の文様を図案化したものであり、その関係はととても深いといえる。1997年には、本校より徒歩5分のところに史跡国分尼寺跡展示館が建設され、当時の回廊や中門が忠実に復元されている。復元された中門・回廊を含めた展示館（博物館）を授業の中で取り扱うことは、古代の建築技術や仏教文化を具体的に理解する手だてとして有効であると考え。また、これまで見学場所ととらえていた展示館をより身近なものとして捉え、その豊富な資料を自分のものとして共有できることを実感させたい。本校のこうした立地条件をふまえ、身近な史跡である上総国分尼寺を学習教材として取り入れることで、生徒が興味を持って取り組み、学習意欲が高まると考え、1年生の古代の学習の中に時間をもうけて取り組むこと

にした。

② 生徒の実態から

今回は、身近な史跡として「国分尼寺」を扱うが、多くの生徒はこの地域に歴史的遺物が多いことは知っており、小学校時代に国分尼寺跡も訪れている。しかし、自らの意志でこの施設を訪問したという生徒は少なく、保護者のアンケートからも今ひとつ十分な理解がなされていないのも事実である。

また、展示館の利用については、見学場所としては捉えているが、その理解は浅く、遺跡の発掘や保存・復元の難しさと努力に着眼している生徒は見られない。また、展示館の利用として、自らの疑問を解決するために活用するといった使い方はされていないというのが現実である。

2 授業計画（実際の授業の流れ）

- 第1時 「空き地の謎」を調べよう
- 第2時 国分尼寺についてレポートしよう
夏休みを利用してレポート作成
- 第3時 調べたことをまとめよう
- 第4時 まとめたことを発表しよう
- 第5時 専門家に訊こう（コミュニティーゲスト）
- 第6時 国分尼寺を紹介しよう
- 第7時 リーフレットをつくろう

- 第1時○学校の脇の空き地には何があったのか、国分寺台地区造成の記録写真から考える。
- 第2時○調べ方やレポートの書き方について説明を聞く。

○質問したい事項をまとめる。

○施設の訪問について手順を知る。

第3時○それぞれがつくったレポートをもとにテーマに基づき班でまとめる。

○まとめた内容を発表する

○疑問を持ったことを発表する。

第4時○班ごとに調べたことを発表する。

第5時○専門家に疑問に思ったことを質問する。

第6時○国分尼寺のすごさを紹介するためにできることを考える。

第7時○班ごとにテーマを決め、リーフレットづくりをする。

3 学習意欲の高まり

記録写真の中に写っている「空き地」が上総国分尼寺の遺跡であることは多くの生徒は知っていたが、学校の敷地までが遺跡の一部であることは知らなかったようで驚いていた。生徒の「調べよう」という意欲は高まったようだ。

<生徒のレポートから>

市原市は奈良時代に、上総の国の政治文化の中心地として栄えました。現在の市原市は古代の市原郡と海上郡のほとんどを占めています。自分の住んでいる地域が歴史的にみて、こんなすごいところなのかと改めて感じ自宅から歩いていけるこの国分尼寺がどうして建てられたのか調べてみることにしました。

夏休みを利用してレポート作成を行うことになったのだが、こちらの期待に反して、展示館を利用する生徒よりも「インターネット」で調べる生徒、しかも出てきたデータや資料をそのまま貼りつけて「レポートです」といって提出する生徒が多かった。事前の指導不足を反省させられた。そこでそれぞれが持ち寄ったレポートをもう一度分類してまとめ直すことにした。お互いのレポートを読みあうことで、自分が気づけなかったことや

新たな視点に気づいた生徒も多く、効果はあったようだ。それぞれのテーマに基づき、再度まとめたものを、お互いに発表しあったのだが、自分で調べたことを発表し、他の生徒からさまざまな評価を受けることで次の学習課題を発見するきっかけとなり、さらに調べようとするなど学習意欲の向上が見られた。レポート発表を聞くことで、もう一度展示館へ行き、新しく生まれてきた課題を解決しようとする生徒も現れた。

<写真左手奥に本校がある>



<生徒の感想から>

- ・なぜ聖武天皇は社会不安などを仏教で鎮めようとしたのか調べてみようと思いました。
- ・昔はペンキなどないのにどのように色を塗ったかふしぎだった。再度行って見てみようと思った。

学校から徒歩5分程度のところに展示館があるということの効果が徐々に現れてきたようだ。

外部人材と協力機関について

上総国分尼寺跡展示館前館長

宮本 敬一さん

「学芸員に質問しよう」に講師として来ていただき、生徒の質問に答えていただいた。

レポート発表から生まれてきた疑問を専門家に

ぶつけ、より詳しく説明を受ける中で、新たな発見があるとともに、さらなる疑問がわくこととなった。

いっぽう、国分尼寺が史跡としても一級品であるにもかかわらず、市内の中学生のアンケートの結果からあまり知られていないという事実を知り、より多くの人に発信したいという意欲がわいてきた。そこで考えたのが、「展示館に自分たちでつくったリーフレットを置く」ということだった。展示館の資料は専門用語が多く小・中学生には難しい。そこで中学生が中学生に向けたリーフレットをつくってみることになった。

<何度も足を運んだ展示館>



<生徒の感想から>

- ・専門用語を使わずに、自分たちの言葉に組み砕くのは、結構難しかったけど、おもしろかった。展示館が近くにあって何度も行った甲斐があった。
- ・いろんなことがわかってうれしかった。展示館に何度も行ったので、じっくりと調べられてよかった。

学校に隣接する空き地への謎からスタートした本研究は、レポート作り、発表会、学芸員との交流をする中で、生徒が自らの言葉で表現したリーフレットを作るという一歩進んだ学習までの発展を見せた。以上のことから、身近な地域に存在す

る展示館を教材として取り入れることで、歴史学習への学習意欲が高まったと考える。

4 時代に対するイメージの深まり

<生徒の作成したレポートより>

- ・国分尼寺は、改めてとても大きいと思いました。展示館の人に質問に答えてもらい、屋根瓦が全部で5600枚使われていて、重さは17tもあることを知りました。
- ・やはり尼寺は大きかった。とくに回廊が思ったより大きかった。

以上は生徒が夏休みに作成したレポートの一部を抜粋したものである。実際に国分尼寺跡展示館を訪れ、その復元された中門・回廊を見学したことで、当時の国分尼寺の規模や建築の技術などを実際に肌で感じることができ、当時の生活の様子や建設の苦労などを想像している生徒も見られた。

インターネットを活用して、資料を収集した生徒もいたが、実際に展示館に行くことでより多くの情報が得られたようである。

<展示館前館長の話をきいて>

- ・上総国の国力が大きく、国司が熱心であったり、地方の郡司が協力していたことがわかった。
- ・東大寺より国分寺を作る方が早かったためにお手本となったのが、大官大寺だったということがわかった

以上は、自分たちが調べてわからなかったことを学芸員に質問した時の感想である。

国分尼寺の建設時の苦労や地方の豪族の協力、モデルとなった寺など普段の学習ではなかなか知ることのできない内容まで踏み込んでいくことができた。

以上のことから、歴史学習に博物館（国分尼寺跡展示館）の見学を取り入れることにより、国分尼寺の建設された時代の上総国の様子やその時代の建築技術など、その時代のイメージが深まったといえる。

5 まとめ

地域の身近な地域教材として、上総国分尼寺を取り上げたことにより、古代の建築技術やその当時の市原市の様子に興味を持ち、意欲的に調べ学習に取り組む生徒が多く見られたといえる。

小学校時代に98%の生徒が博物館に見学体験を持っていたが、「昔、大きなお寺があったんだ。」という認識で終わっていた。今回は個別の調べ学習後、レポート発表を通して、多くの「情報の共有化」が図られ、その後のより深まりのある個別の課題意識を持って今回の博物館見学をすることができたといえる。そのことにより、抽象的な時代イメージから具体的なイメージ化が行われたのである。

また、外部人材の宮本敬一さんにこれらの活動を通じた課題点を質問したことにより、「知の統合」ができ、その当時の上総国分尼寺が建設された時代背景や中央と地方のつながりおよび文化を多面的に認識することができたといえる。

「道鏡の弟の弓削清人が〜」「上総国分尼寺の瓦のマークが東大寺と同じだなんてすごい」「上総の国には東大寺と同じ物を作る技術の人がいたんだ」という感想を持つ子どもたちもいた。

これらの学習過程を通して、郷土に対する『新たな再発見』が子どもたちの中に生み出されていったといえる。その結果が「僕たちの住んでいるこの場所に日本最大の国分尼寺があったなんてすごい！」「僕たちの住んでいる場所を大切にしたい」「復元しみんなに説明したい」という、普段気づいていなかった歴史的な重要性を持つ文化財が本当に自分たちの住んでいる地域にある驚きと喜び、同時に今後文化財をしっかりと守っていかねばならないという意識が見られるようになった。

このことは、自分の住んでいる地域の将来の在り方を国分尼寺の学習過程を通して考えることができたといえよう。地域の未来の主権者としての意識を高めたといえる。

<創建当時と同じ技法で復元された回廊>



今後の課題として

レポート作成では、インターネットを活用する生徒が6割を超えた。しかし、インターネットから取り出せる膨大な情報を前に、資料や用語をよく理解しないまま選択し、活用してしまったレポートが多かった。今後は、レポート作成におけるインターネット活用時には、より具体的な課題意識を持たせると同時に、インターネットから理解できない用語を気にせず発表のためだけに関連資料を引き出したレポート作りから、自分の考えを反映するための情報選択能力の育成が課題となろう。そのためにも、学習過程のより一層の工夫を今後も研究していきたいと考える。

* * *